

TOTTORI KETAKA AOYA
鳥取県気高郡青谷町

青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

養郷村内出土地Ⅱ、養郷村内出土地Ⅲ、青谷上寺地遺跡

2002.3

鳥取県気高郡

青谷町教育委員会

序 文

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成13年度に実施した青谷町内遺跡の試掘調査記録です。

青谷町は自然環境に恵まれ、東西の丘陵に挟まれた地域には、有形・無形の文化遺産が数多く残っています。特に平成10年度から実施されてきた青谷上寺地遺跡の発掘調査では、弥生時代の祭祀場跡、優れた木製品、鉄製品など弥生時代のイメージを一新させる重要な発見が相次いでいます。中でも脳の発見は世界中でも数例しかなく、これからの研究の成果が期待されます。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく諸関係機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げます。

なお、この報告書は不十分な所も多ありますが、私たちの郷土理解に役立てていただくとともに、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成14年3月

青谷町教育委員会
教育長 前田保幸

例 言

- 1 本報告書は、平成13年度国庫補助金及び県補助金を受けて青谷町教育委員会が実施した青谷町内遺跡発掘調査の記録である。
- 2 本発掘調査事業は、宅地造成に伴う養郷村内出土地Ⅱ、予防治山に伴う養郷村内出土地Ⅲ、若者向け住宅建設事業に伴う青谷上寺地遺跡の範囲及び性格を確認し、工事との調整を図るために行った試掘調査である。
- 3 青谷上寺地遺跡のボーリング調査は応用地質株式会社へ委託した。
- 4 発掘調査及び報告書作成にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターの指導と協力を得た。
- 5 本書の作成は、調査員の森、加川が執筆・編集を行った。
- 6 本書に使用した方位は磁北で、実測図の縮尺は原則として遺構 1/80、遺物 1/3 で示し、土色及び土器類の色調を表すには農林水産技術会議事務局監修「標準土色帳」によった。地図は国土地理院の承認を得て作成された「青谷町全図」の5万分の1の地図を利用した。
- 7 本書における遺構、遺物の略号は次のように示す。
T：トレンチ P：ピット Po：土器
- 8 発掘調査で得られた日誌・図面・写真・遺物等は、青谷町教育委員会が保管する。
- 9 第5章は分析結果をご寄稿いただいたものである。
 - ・青谷上寺地遺跡土壌の珪藻分析は、株式会社 古環境研究所に委託した。
 - ・青谷上寺地遺跡出土土の分析は放送大学鳥取学習センター 赤木三郎先生に玉稿をいただいた。

調査関係者

調査主体	青谷町教育委員会
調査団長	久野浩太郎、前田保幸（青谷町教育委員会教育長）
調査員	森 佳樹（青谷町教育委員会事務局生涯学習係長） 加川 崇（青谷町教育委員会事務局生涯学習係主事）
事務局	姫田 弘新、森 佳樹、加川 崇、尾崎 淳（以上青谷町教育委員会事務局）
調査指導	赤木 三郎、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター
作業協力	現場作業員 石原 敬子、北島チズ子、小谷 恭子、田中 知儀 橋本 健 土橋 道夫、広沢 博子
整理作業員	田中 清江、浜田佐奈枝

本文目次

第1章 発掘調査の経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の概要	5
第1節 養郷村内出土地Ⅱ	5
(1) 調査の方法	5
(2) トレンチの概要	5
第2節 養郷村内出土地Ⅲ	6
(1) 調査の方法	6
(2) トレンチの概要	6
第3節 青谷上寺地遺跡	8
(1) 調査の方法	8
(2) トレンチの概要	8
第4章 まとめ	10
第5章 自然科学分析の結果	11
第1節 珪藻分析結果	11
第2節 青谷上寺地遺跡調査概報 ―とくに遺貝群集について―	16

挿図目次

挿図1 青谷町内の主な遺跡分布図	2
挿図2 養郷村内出土地Ⅱ・Ⅲトレンチ配置図	5
挿図3 養郷村内出土地Ⅱ第2トレンチ平面図及び土層図	6
挿図4 養郷村内出土地Ⅲ第1トレンチ平面図及び土層図	6
挿図5 養郷村内出土地Ⅲ出土遺物実測図	7
挿図6 青谷上寺地遺跡トレンチ配置図	8
挿図7 青谷上寺地遺跡第2トレンチ柱状図	9
挿図8 青谷上寺地遺跡第3トレンチ柱状図	9
挿図9 青谷上寺地遺跡出土遺物実測図	9
挿図10 青谷上寺地遺跡における主要珪藻ダイアグラム	15

表目次

表1 養郷村内出土地Ⅱトレンチ一覧表	6
表2 養郷村内出土地Ⅲトレンチ一覧表	6
表3 養郷村内出土地Ⅲ出土遺物観察表	7
表4 青谷上寺地遺跡トレンチ一覧表	8
表5 青谷上寺地遺跡出土遺物観察表	9
表6 青谷上寺地遺跡における珪藻分析結果	13

図 版 目 次

- 図版 1 養郷村内出土地Ⅱ・Ⅲ遠景 養郷村内出土地Ⅱ第2トレンチ 養郷村内出土地Ⅲ第1トレンチ
養郷村内出土地Ⅲ出土遺物 養郷1号墳現況 養郷村内出土地Ⅲ第3トレンチ
- 図版 2 青谷上寺地遺跡ボーリング設置状況 青谷上寺地遺跡第2トレンチ 青谷上寺地遺跡第2ト
レンチ牡蠣出土状況 青谷上寺地遺跡出土遺物 青谷上寺地遺跡第2トレンチ出土牡蠣、青谷上
寺地遺跡第2トレンチ出土貝
- 図版 3 青谷上寺地遺跡の珪藻
- 図版 4 青谷上寺地遺跡ボーリング出土貝

第1章 発掘調査の経緯

(1) 養郷村内出土地Ⅱ

養郷村内出土地は以前の踏査により、土師器片を表採しており、すでに周知の遺跡となっていた。

町建設水道課より宅地造成計画が当教育委員会にもたらされた。このため、県教育委員会文化課及び埋蔵文化財センター、当教育委員会で協議した結果、試掘調査を行うこととなった。調査期間は2001年11月19日から2001年11月21日までである。

(2) 養郷村内出土地Ⅲ

養郷村内出土地は以前の踏査により、養郷1号墳の存在を確認し、さらに土師器片等を表採しており、すでに周知の遺跡となっていた。

町産業振興課より、砂防ダム建設及び仮設道建設計画が当教育委員会にもたらされた。このため、県教育委員会文化課及び埋蔵文化財センター、当教育委員会で協議した結果、試掘調査を行うこととなった。調査期間は2001年4月26日から2001年5月10日までである。

(3) 青谷上寺地遺跡

青谷上寺地遺跡は平成10年度から発掘調査が実施され、弥生時代の祭祀場跡、大規模な護岸工事跡などさまざまな遺構、遺物などが発掘されている。しかし、遺跡の範囲はまだ確定しておらず、どのような範囲・規模かはわかっていない。町建設水道課より若者向け住宅建設事業が当教育委員会にもたらされ、2001年度に試掘調査を実施した。この調査では壁面の崩壊が著しく、2mで掘り下げを断念した。その後住宅供給公社が実施したボーリングコア（地下5m付近）の牡蠣を年代測定したところ、弥生時代前期の年代を得た。このため県教育委員会文化課、住宅供給公社、埋蔵文化財センター、町建設水道課、当教育委員会で協議した結果、径60cmのボーリングによる調査を実施することとなった。調査期間は2002年2月1日から2002年2月20日までである。

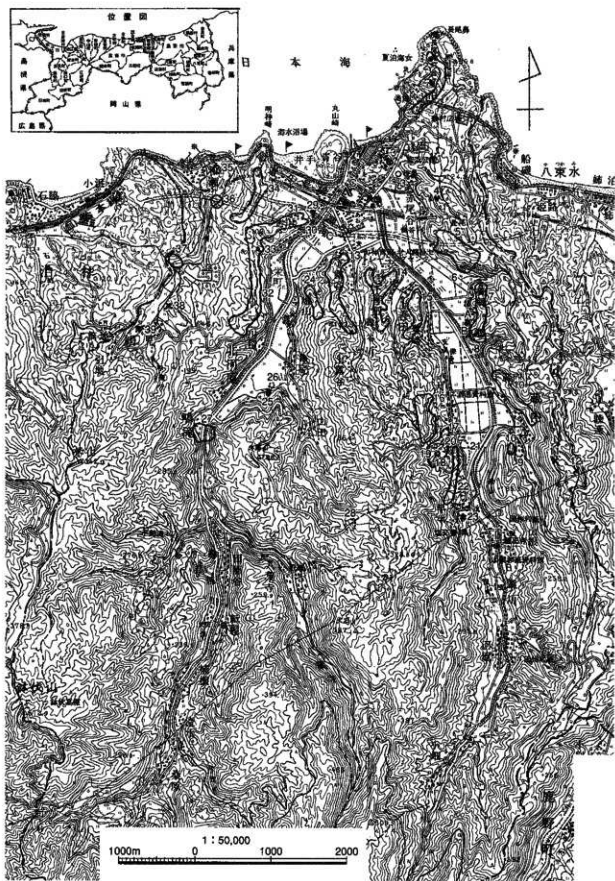
第2章 遺跡の位置と環境

青谷町は、鳥取県の中央よりやや東に位置し、東部地域の西端、旧国名で言えば因幡国に属し、伯耆国との国境にある。北は日本海に面し、東は気高町、西は泊村・東郷町、南は鹿野町・三朝町に隣接し、東西約7.7km、南北約13kmと南北に長く、面積約68.3km²の町である⁽¹⁾。

町の南城は標高500mを越す山地で、そこから北へ伸びる溶岩台地が町の東西を取り囲み町界をなしている。溶岩台地の北端は長尾鼻、オゴノ鼻と続き、30mを超える断崖となって日本海に突出している。また、溶岩台地の東を日置川、西を勝部川が流下し、河口近くで合流し、日本海に注いでいる。合流地点付近に沖積平野、海岸部に砂丘が形成されている。町内の砂浜は、全国的にも珍しい鳴り砂の浜として知られている⁽¹⁾。

町内の遺跡は、確認されているものだけでも約450ヶ所あり、その大半は古墳である。

今回調査した養郷村内出土地Ⅱ・Ⅲ(A・B)は青谷町の東側を流れる日置川下流域の左岸にある。この周辺には、船や星の線刻壁画が施され、県の史跡に指定されている阿古山22号墳⁽⁶⁾を有する阿古山古墳群⁽⁵⁾、町の史跡に指定されている養郷10号墳⁽⁸⁾を有する養郷古墳群⁽⁷⁾などがある。



挿図1 青谷町内の主な遺跡分布図

▲▲▲▲▲▲▲▲

青谷上寺地遺跡(C)は青谷町の西側を流れる勝部川と東側を流れる日置川の合流点付近に位置する。青谷上寺地遺跡は、1997年、1998年、2000年に試掘調査が実施され、1998年から2001年にかけて財団法人鳥取県教育文化財団による発掘調査が実施されている。その結果、弥生時代の祭祀場跡や大規模な護岸工事跡のほか、当時の生業がわかる遺物も多く出土している。鍬鋤類などの木製農耕具や石包丁、多量の炭化米や水田跡が確認されている。また弥生時代前期末葉から貝塚が形成されはじめ、その中にはカキやムササキイガイなどの貝、イノシシ、鹿などの獣骨が含まれている。土器は縄文時代から中世にかけての土器、特に弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての土器は膨大な量にのぼる。また在地の土器以外にも、朝鮮半島系の無文土器、北陸系、吉備系などが認められる。そのほか270点を越える鉄製品が出土しており、中には鋳造鉄斧や鍛造鉄斧、素環頭刀子、貨泉、鏡など大陸からの舶載品が多く認められることは、当時の対外交渉の一端をうかがい知ることができる。また弥生時代後期の溝の中から大量の人骨が出土し、中には殺傷痕のある人骨も確認されている。出土した頭蓋骨3点の中には腐が残っており今後の研究成果が期待される。しかし大量の遺物、遺構が確認されているにもかかわらず、住居跡はまだ確認されておらず、周辺の開発には注意する必要がある。⁽³⁻⁸⁾ 周辺の遺跡としては南側丘陵上に露谷古墳群(13)、沖積平野西側には土師器等が出土した青谷飯田出土地(30)、西側丘陵上にはほぼ完形の弥生時代中期の壺が出土した青谷第4遺跡(31)⁽⁹⁾、吉川古墳群(32)が存在する。

その他の青谷町内の遺跡は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡は、今のところ確認されていない。縄文時代の遺跡としては、砂丘地にある青谷高校の井戸掘り作業中に偶然発見された青谷第1遺跡(3)⁽¹⁰⁾がある。ここでは、縄文時代中期から弥生時代、古墳時代にかけての土器片が出土している。このほか縄文時代の遺跡としては、縄文時代前期土器片の散布が確認された蔵内上長谷第2遺跡(11)⁽¹¹⁾、1995年に試掘調査が実施され、縄文時代後期の土器片が出土した蔵内上長谷第4遺跡(12)⁽¹¹⁾、瀬見部落周辺の石皿や石斧が出土した長和瀬稲葉尾遺跡(38)⁽¹⁰⁾がある。

弥生時代の遺跡の遺跡としては、前述の青谷上寺地遺跡、青谷第4遺跡、のほかに大口第1・第2遺跡(18・19)、蔵内水船遺跡(9)がある。大口第1遺跡は1984年に発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代にかけての土壌墓や貯蔵穴、堅穴住居跡が確認されている。大口第2遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけての墳丘墓、堅穴住居跡が確認されている。⁽¹²⁻¹⁴⁾ また大口第1・第2遺跡が所在した丘陵裾部には1981年に発掘調査が実施されカヤマ遺跡(21)⁽¹⁵⁾が存在する。カヤマ遺跡では弥生時代後期から奈良時代にかけての住居跡や古墳が確認されている。

古墳時代には町の中央と東西の丘陵上に多数の古墳が造営されている。現在確認されている古墳や散

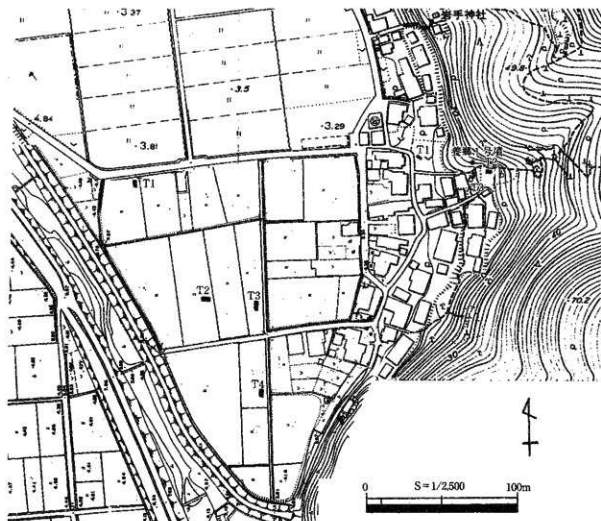
A 養郷村内出土地Ⅱ	12 蔵内上長谷第4遺跡	26 鳴滝宮ノ前遺跡
B 養郷村内出土地Ⅲ	13 露谷古墳群	27 鳴滝古墳群
C 青谷上寺地遺跡	14 善田古墳群	28 山田淡谷東平遺跡
1 長尾鼻古墳群	15 奥崎古墳群	29 相屋神社
2 長尾鼻1号墳	16 大坪古墳群	30 青谷飯田出土地
3 青谷第1遺跡	17 大口古墳群	31 青谷第4遺跡
4 東山古墳	18 大口第1遺跡	32 吉川古墳群
5 阿古山古墳群	19 大口第2遺跡	33 吉川43号墳
6 阿古山22号墳	20 大口第3遺跡	34 井手古墳群
7 養郷古墳群	21 カヤマ遺跡	35 長和瀬古墳群
8 養郷10号墳	22 早牛古墳群	36 長谷古墳群
9 蔵内水船遺跡	23 利川神社	37 釜ノ口古墳群
10 蔵内古墳群	24 亀尻古墳群	38 長和瀬稲葉尾遺跡
11 蔵内上長谷第2遺跡	25 神前神社	39 幡井神社

布地は海岸から約6km以内の位置に分布し、ほとんどの古墳は直径10mから20m程度の円墳と考えられる。町内の主な古墳は、東側の台地・丘陵に北側から町内最大の前方後円墳である長尾鼻1号墳(2)(全長34m)を有する長尾鼻古墳群(1)、町内第2の前方後円墳である東山古墳(4)(全長28m)、前述の阿古山22号墳を有する阿古山古墳群、養那古墳群、蔵内古墳群(10)と続く。中央部の丘陵には北側から露谷古墳群、その西に亀尻古墳群(24)、東に善田古墳群(14)があり、さらに南には町の史跡に指定されている奥崎古墳群(15)があり、その南側には大坪古墳群(16)、大口古墳群(17)、早牛古墳群(22)が連なっている。中央西側の丘陵裾部には金環が出土した鳴滝古墳群(27)が所在する。西側の丘陵には相屋神社(29)⁽¹⁶⁾から南側に船の線刻壁画が施された吉川43号墳⁽³³⁾を有する吉川古墳群が所在し、その西側の丘陵には井手古墳群(34)、長和瀬古墳群(35)、長谷古墳群(36)、釜ノ口古墳群(37)と続いている。古墳時代の古墳以外の遺跡は縄文・弥生時代の項で述べたように、青谷第1遺跡、青谷上寺地遺跡、大口第1・第2・第3遺跡、カヤマ遺跡が主なものである。

奈良時代以降の遺跡には1997年に発掘調査が実施された山田淡谷東平遺跡(28)⁽⁵⁾があり、中世の礎石建物跡、鍛冶炉跡に伴うと考えられる鉄滓、が確認されている。また1999年に発掘調査が実施された鳴滝宮ノ前遺跡(26)⁽¹⁷⁾では中世の上師器が出土している。この他には前述の青谷上寺地遺跡、カヤマ遺跡が上げられる。

歴史上の資料としては、因幡国の官道に置かれた4カ所の駅のうち「柏尾駅」の有力な候補地といわれる相屋神社周辺や、勝部・日置といった部民制度に由来するといわれる郷名が残っている。⁽¹⁶⁾ また時代はやや下るが、町内の式内社である利川神社(23)と幡井神社(39)がそれぞれに早牛・絹見に、式外社である相屋神社と神前神社(25)がそれぞれ青谷・鳴滝にあることは⁽¹⁶⁾、遺跡との関わりが考えられる。

第3章 調査の概要



挿図2 養郷村内出土地Ⅱ・Ⅲトレンチ配置図

第1節 養郷村内出土地Ⅱ

(1) 調査の方法

この周辺の丘陵上あるいは山裾部には養郷古墳群、阿古山古墳群が存在しているが、その住居跡等は確認されていない。このため平野部分に遺跡が存在する可能性が考えられるため、開発区域内に1.5m×4.0mを基準としたトレンチを設定し掘り下げを実施した。なお養郷村内出土地は昨年も試掘調査を実施しているため、昨年度をⅠ区、今年度をⅡ区とする。またわざわざ離れた位置を試掘調査したため、養郷村内出土地Ⅲとする。

(2) トレンチの概要

第1トレンチ

このトレンチは開発区域内に1.2m×2.0mの規模で設定し、掘り下げを実施した。遺構、遺物は確認できなかった。

第2トレンチ

このトレンチは開発区域内に1.0m×3.0mの規模で設定し、掘り下げを実施した。第4層を掘り込む

落ち込みを確認したが、その中から近現代の遺物と考えられる甕が出土している。また第5層からは近代の瓦が出土している。遺構、遺物は確認できなかった。また周辺に住む方から、この辺りには明治の初め頃に天理教の施設が建っていたとご教示頂いた。

トレンチ番号	トレンチの規模	遺構	遺物
T 1	1.2m×2.0m		
T 2	1.0m×3.0m		
T 3	2.0m×4.0m		
T 4	1.5m×3.5m		

表1 養郷村内出土地Ⅱトレンチ一覧表

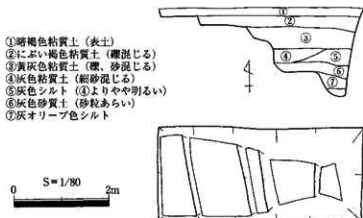
第3トレンチ

このトレンチは開発区域内に2.0m×4.0mの規模で設定し、掘り下げを実施した。約1.0m掘り下げた所で、壁面が崩壊したため、掘り下げを断念した。

第4トレンチ

このトレンチは開発区域内に1.5m×3.5mの規模で設定し、掘り下げを実施した。遺構、遺物は確認できなかった。

H=4.5m



挿図3 養郷村内出土地Ⅱ第2トレンチ平面図及び土層図

第2節 養郷村内出土地Ⅲ

(1) 調査の方法

前節でも述べたが、周辺には阿古山古墳群、養郷古墳群が存在し、また調査地の隣地には養郷1号墳が存在する。養郷1号墳は石室がすでに露出し、側壁と奥壁がころうじて残っているだけで、墳形及び規模は確認できない。このため開発区域内に周溝等の存在の有無、また住居跡の有無を確認するためにトレンチを3ヶ所設定し、掘り下げを実施した。

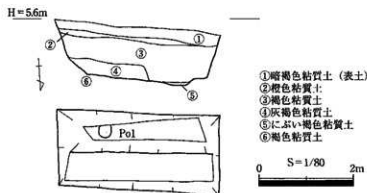
(2) トレンチの概要

第1トレンチ

このトレンチは開発区域内西側に1.6m×3.4mの規模で設定し、掘り下げを実施した。このトレンチでは表土から約35cm掘り下げた所で、近

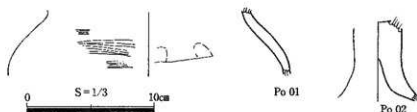
トレンチ番号	トレンチの規模	遺構	遺物
T 1	1.6m×3.4m	ピット	土師器
T 2	1.1m×2.0m		
T 3	1.4m×3.9m		土師器

表2 養郷村内出土地Ⅲトレンチ一覧表



挿図4 養郷村内出土地Ⅲ第1トレンチ平面図及び土層図

現代の遺物を含む攪乱層を確認した。さらに掘り下げた所、地山を掘り込むビット(P01)を確認した。またその周りから土師器片が出土している。実測できたものはPo01、Po02である。



挿図5 美郷村内出土地Ⅲ出土遺物実測図

出土位置	土器番号	取上番号	器種	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
T1	Po01	1	土師器 壺	② 5.1△	胴部	内) ケズリ 指頭 丘痕 外) ハケ目	密	良好	外) 黄橙色 内) 黄橙色	
	Po02	1	土師器 高坏	② 6.2△	両端部を欠く 筒部	内外面……ナデ	密(1mm 程度の砂 粒含む)	良好	外) 黄橙色 内) 黄橙色	

注…法量の○数字は次のとおりとする。①口径、②器高、である。復元した計測値に※印、残存値に△印を付した。

表3 美郷村内出土地Ⅲ出土遺物観察表

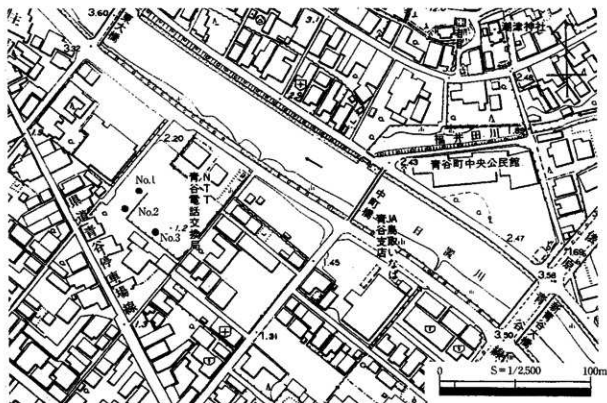
第2トレンチ

このトレンチは開発区域内に1.1m×2.0mの規模で設定し、掘り下げを実施した。遺構、遺物は確認できなかった。

第3トレンチ

このトレンチは1.4m×3.9m開発区域内のほぼ中央部分に設定し、掘り下げを実施した。約8.0m離れた地点に美郷1号墳が位置する。表土から約40cm掘り下げたところで第2層に達した。第2層は土師器片を2点含んでいたが、磨耗が著しく、周辺からの流れ込みと考える。また地山と考えられる層が掘り込まれていたが、第1層からの掘り込みと考えられる。またトレンチのほぼ中央付近から石を検出しているが、自然石と考えられる。

第3節 青谷上寺地遺跡



挿図6 青谷上寺地遺跡トレンチ配置図

(1) 調査の方法

開発区域の周辺には青谷上寺地遺跡が存在し、その範囲、性格などは解明されていない。このため周辺に遺跡が広がる可能性があるため、開発区域内に径60cmのボーリングを3ヶ所設定し、掘り下げを実施した。

トレンチ番号	遺構	遺物
T 1		
T 2		土玉
T 3		

表4 青谷上寺地遺跡トレンチ一覧表

(2) トレンチの概要

第1トレンチ

第1トレンチは開発区域内の北側に設定し、実施した。この地点は以前住宅供給公社によりボーリング調査が実施され、-5.0m付近から牡蠣が出土している。表土から約2.0mまでは客土である。-3.5m付近まではマコモが厚く堆積している。その後砂混じりの粘質土になり、その中には生痕を確認することができた。-4.2m付近で砂層を確認し、-4.8m付近で粘質土中に牡蠣を確認することができた。遺物は確認することができなかった。

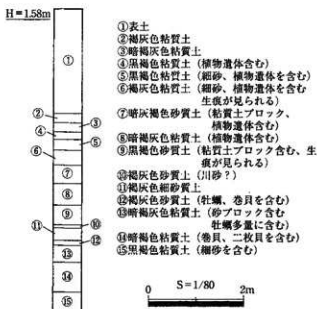
第2トレンチ

第2トレンチは第1トレンチの南側に設定し、実施した。-4.8m付近までは第1地点とほぼ同様の層を確認することができる。その後-5.0m付近から牡蠣を確認することができた。さらに掘り下げたところ、牡蠣の層が約50cmにわたって堆積していることを確認した。ほとんどの牡蠣が口を閉じたまま重なっているのを確認した。さらに掘り下げた所、体長約2~3cm程度の巻貝、赤貝などを含む層を確認することができた。牡蠣層の中から土玉(Po01)が1点出土している。また第9層、第11層、第13層及

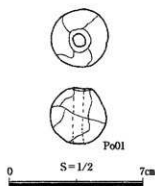
び第14層で珪藻分析を実施しており、結果については第5章で述べる。

第3 トレンチ

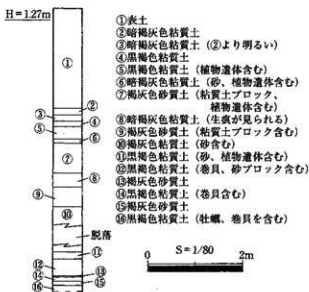
第3 トレンチは第2 トレンチの東側に設定し、実施した。-4.6m付近までは第1、第2地点とはほぼ同様の層を確認することができる。その後-5.0m付近まではケーシングから脱落してしまい、詳細な確認はできなかつた。その後さらに掘り下げた所、第2地点の第14層に相当する層を確認することができた。なおこの地点のボーリングでは第2地点のような明確な牡蠣層を確認することはできなかつた。また第10層、第11層及び第12層で珪藻分析を実施しており、その結果については第5章で述べる。



挿図7 青谷上寺地遺跡第2 トレンチ柱状図



挿図9 青谷上寺地遺跡出土遺物実測図



挿図8 青谷上寺地遺跡第3 トレンチ柱状図

出土位置	土器番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
T 2	Po01	1	土玉	①2.9 ②2.9	ほぼ円形を呈す		密	良好	黒褐色	

註…法量の○数字は次のとおりとする。①口径、②器高、である。復元した計測値に△印、残存値に△印を付した。

表5 青谷上寺地遺跡出土遺物観察表

第4章 まとめ

養郷村内出土地Ⅱにおける今回の調査では、いずれのトレンチでも遺物、遺構を確認することができなかった。養郷の西田圃の中に天理教施設があったと町誌⁽¹⁾に記載されており、今回の試掘調査で第2トレンチから出土した近現代の瓦片や陶磁器片はこれらに関係するものと考えられる。以上の事から開発区域内に遺跡の存在は認められなかった。

養郷村内出土地Ⅲにおける今回の調査では、第1トレンチ、第3トレンチで遺物を確認し、第1トレンチでは遺構を確認した。また第3トレンチは養郷1号墳のすぐそばに設定したが、遺構等は確認できなかった。以上の事から第1トレンチ周辺に遺跡の存在を確認することができた。また工事は遺構面まで達しないと判断したため、慎重に工事を実施していただくようお願いした。

青谷上寺地遺跡における今回の調査では、第1、第2トレンチで牡蠣層を確認することができた。また第2トレンチでは遺物を確認することができた。今回のトレンチで確認した牡蠣層はほとんどの牡蠣が口を閉じた状態で出土していることから自然死のものと考えられる。またその下から出土する貝はいずれも自然死の状態で出土している。なお詳細は次章の「青谷上寺地遺跡出土品について」、「珪藻分析結果」で述べている。

参考文献等

- (1) 『青谷町誌』青谷町誌編さん委員会 1984年
- (2) 『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財センター 1986年
- (3) 『青谷上寺地遺跡1・2』財団法人 鳥取県教育文化財団 2000年
- (4) 『青谷上寺地遺跡3』財団法人 鳥取県教育文化財団 2001年
- (5) 『青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅵ』青谷町教育委員会 1997年
- (6) 『青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』青谷町教育委員会 1998年
- (7) 『青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅷ』青谷町教育委員会 1999年
- (8) 『青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅸ』青谷町教育委員会 2000年
- (9) 『弥生時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター 1988年
- (10) 『旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター 1988年
- (11) 『青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』青谷町教育委員会 1996年
- (12) 『大口古墳群発掘調査概報』青谷町教育委員会 1980年
- (13) 『大口遺跡群発掘調査報告書』青谷町教育委員会 1985年
- (14) 『大口古墳群発掘調査報告書』青谷町教育委員会 1989年
- (15) 『カヤマ遺跡試掘調査報告書』青谷町教育委員会 1982年
- (16) 『鳥取県史 1 原始・古代』鳥取県
- (17) 『鳴滝宮ノ前遺跡発掘調査報告書』青谷町教育委員会 2000年

第5章 自然科学分析の結果

第1節 珪藻分析結果

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

ここでは、青谷上寺地遺跡の堆積物について珪藻分析を行い、当時の堆積環境について検討する。

2. 試料

試料は、黒褐色シルト(2-1、2-2、2-3)、黒灰色シルト粘土(2-4)、黒褐色シルト粘土(3-1)、黒褐色シルト(3-2、3-3)の7点の堆積物である。

3. 方法

試料に以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から1cm³を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら一晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入し、プレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600~1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

試料から出現した珪藻は、貧塩性種(淡水生種)24分類群、真-中塩性種(海-汽水生種)26分類群、である。計数された珪藻の学名と個数を表6に示す。また、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図10に示し、主要な分類群は写真に示す。

(1) 2

2-1、2-2、2-3は珪藻殻密度が非常に低い。2-4は珪藻殻密度が非常に高く、真-中塩性種の占める割合が高い。とくに、*Nitzschia lanceolata*、*Diploneis* sp.、海水泥質干潟指標種群の *Nitzschia granulata*、海水砂質干潟指標種群の *Achnanthes brevipes*、*Achnanthes delicatula*、*Rhaphoneis surirella*などが出現する。貧塩性種では、中~下流性河川指標種群の *Achnanthes lanceolata*、各生態性が不定性の *Rhopalodia gibberula*の出現率がやや高い。

(2) 3

3-1、3-3は珪藻殻密度が非常に低い。3-2は珪藻殻密度がやや高く、貧塩性種では各生態性が不定性の *Rhopalodia gibberula*、*Cocconeis placentula* が多く出現する。また、流水性種の *Rhoicosphenia abbreviata* が出現する。真一中塩性種では、海水藻場指標種群の *Cocconeis scutellum*、海水泥質干潟指標種群の *Nitzschia granulata*、内湾指標種群の *Grammatophora macilenta*、*Melosira sulcata* などの出現率が高い。

5. 珪藻分析から推定される堆積環境

(1) 2

2-1、2-2、2-3は珪藻密度が非常に低い。このことについては、土壌の堆積速度が速いことにより珪藻などの微遺体が堆積しにくかったことが考えられる。なお、真一中塩性種(海一汽水生種)や海水砂質干潟指標種群、貧塩性種が出現することから、これらは干潟の堆積物であったと考えられる。2-4は珪藻殻密度が非常に高く、真一中塩性種の海水泥質干潟指標種群、海水砂質干潟指標種群や貧塩性種の中～下流性河川指標種群、各生態性が不定性の出現率がやや高いことから、堆積環境は海水と淡水の混じる干潟の潮間帯が示唆される。

(2) 3

3-1、3-3は珪藻密度が非常に低いことから、土壌の堆積速度が速く珪藻などの微遺体が堆積しにくかったことなどが考えられる。なお、真一中塩性種(海一汽水生種)や海水砂質干潟指標種群、貧塩性種の出現から、両者は干潟の堆積物であったと考えられる。3-2については、真一中塩性種(海一汽水生種)で海水藻場指標種群、海水泥質干潟指標種群、内湾指標種群が比較的多く、中～下流性河川指標種群なども出現することから、海水と淡水とが混じる干潟から内湾の潮間帯の堆積環境が推定される。

6. まとめ

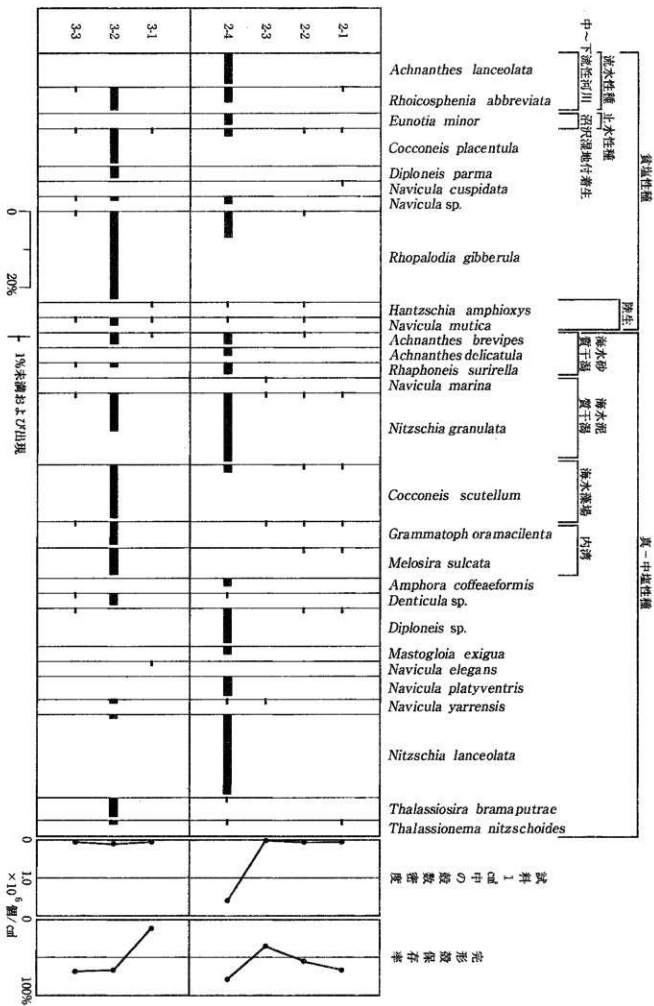
青谷上寺地遺跡で採取された堆積物について珪藻分析を行った。その結果、2-1、2-2、2-3、3-1、3-3は干潟の堆積物、2-4は干潟の潮間帯の堆積物、3-2は干潟から内湾の潮間帯の堆積物であったと推定された。

参考文献

- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.
- Patrick, R. eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.
- Low, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.
- Patrick, R. eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.

表6 青谷上寺地遺跡における珪藻分析結果

分類群	分 類 群						流水性 a	環 境 1	環 境 2	環 境 3	塩 分 a	塩 分 b	ph	phと塩度	ECOL
	2-1	2-2	2-3	2-4	3-1	3-2									
貧塩性種 (淡水生種)															
<i>Achnanthes hungarica</i>				1			ind			好塩性	ind	好アルカリ性		付着生	
<i>Achnanthes lanceolata</i>				9			好-真流水性	K中～下流性河川	広布種	貧塩水性	ind	好アルカリ性	ind	付着生	
<i>Amphora copulata</i>						1	ind	淡水広布種	U広適応性	F淡水底生種	ind	好アルカリ性			
<i>Amphora montana</i>						1	ind	R A陸生A	広布種		ind	好アルカリ性	ind		
<i>Amphora sp.</i>				1			unk				unk				
<i>Coloneis silicea</i>						1	ind			耐汚濁性	ind	好アルカリ性	好酸性	底生	
<i>Cocconeis plicatula</i>	2	6		2	2	9	6	ind	付着生広布種	U広適応性	F淡水底生	ind	好アルカリ性	付着生	
<i>Cymbella silicea</i>	1						ind			T好清水性		ind	ind		
<i>Cymbella sinuata</i>						1	好流水性	K中～下流性河川	T好清水性		ind	ind	好アルカリ性	付着生	
<i>Diatoma mesodon</i>				1			好流水性	K中～下流性河川	T好清水性		ind	好酸性	好酸性	付着生	
<i>Diatoma sp.</i>	1											好酸性	好酸性		
<i>Diploneis parva</i>						3	ind								
<i>Eosetia minor</i>				3			好止水性	O沼沢湿地付着生	T好清水性	貧塩水性	線塩性	好酸性		付着生	
<i>Gomphonema parvulum</i>						1	好流水性		U広適応性		ind	好アルカリ性	ind	付着生	
<i>Gomphonema truncatum</i>						1	好止水性		T好清水性	やや好温 季	ind	好アルカリ性	ind		
<i>Hantzschia amphioxys</i>		1		1	2		ind	R A陸生	U広適応性		ind	好アルカリ性		底生	
<i>Navicula contorta</i>				1			ind	R A陸生A, T好清水性	T好清水性		ind	好アルカリ性		底生	
<i>Navicula cuspidata</i>		2					ind				ind	好アルカリ性		底生	
<i>Navicula mutica</i>		1		1	2	2	1	ind	R A陸生A	S好汚濁性	汽水にも	ind	好アルカリ性	ind	底生
<i>Navicula sp.</i>				2	1	1	unk				unk				
<i>Pinnularia nodosa</i>		1					好止水性	沼沢湿地付着生種O				好酸性	ind	底生	
<i>Rhizocapsella abbreviata</i>		1		5	6	1	好流水性	K中～下流性河川	T好清水性			好酸性	好酸性		
<i>Rhopalodia gibberula</i>		1		8	24	1	ind	高温性	沼岸種	汽水-淡水		好塩性	好塩性		
<i>Synedra ulna</i>				1			好止水性		U広適応性		ind	好アルカリ性		付着生, 浮遊性	
真-中塩性種 (海-汽水生種)															
<i>Achnanthes brevipes</i>		2		3	4	3	汽水	D 1 海水砂質干潟			付着				
<i>Achnanthes delicatula</i>				2			海水-汽水	D 1 海水砂質干潟			底生-付着				
<i>Actinocyclus ingens</i>			1												
<i>Actinocyclus sp.</i>	1						海水	A外洋	沿岸		浮遊				
<i>Amphora coffeiformis</i>				2			海水-汽水				底生				
<i>Amphora venosica</i>						1	海水-汽水				底生				
<i>Campylodiscus minutus</i>			1												
<i>Cocconeis scutellum</i>	3	2		2	15		海水-汽水	C 1 海水藻場	沿岸, 極めて広域		付着性, 浮遊性, 海藻付着				
<i>Denticula sp.</i>				1	3	2									
<i>Diploneis sp.</i>	2	4		10		1	海水-汽水								
<i>Diploneis suborbicularis</i>						1	海水-汽水	E 1 海水泥質干潟			底生				
<i>Gomphonema macilenta</i>	1	1	10		6	8	海水	B内湾							
<i>Mastoglossia exigua</i>				2											
<i>Melobesia antata</i>	4	2			7		海水	B内湾	沿岸, 縄文海進, 沿岸, 暖かい低鹹水						
<i>Navicula elegans</i>					12		海水-汽水		広分布, 沿岸-内湾, 海進, 沿岸湖沼, 汽水域						
<i>Navicula marina</i>			2				海水-汽水	E 1 海水泥質干潟			底生				
<i>Navicula menticular</i>				1			汽水	E 2 汽水泥質干潟							
<i>Navicula platyventris</i>				6			海水-汽水								
<i>Navicula salinarum</i>					1		海水-汽水	D 2 汽水砂質干潟, E 1 海水泥質干潟	沿岸		底生				
<i>Navicula yarenensis</i>			1	1	1		汽水								
<i>Nitzschia granulata</i>	6	9	1	21	10	3	海水-汽水	E 1 海水泥質干潟			底生				
<i>Nitzschia lanceolata</i>				24	1		海水-汽水		沿岸-内湾		底生				
<i>Nitzschia punctata</i>						1	海水-汽水	E 1 海水泥質干潟							
<i>Rhaphoneis surirella</i>				4	1	1	海水	D 1 海水砂質干潟			底生, 付着				
<i>Thalassiosira brumptae</i>				1	5		海水-汽水(-淡水)		沿岸, 淡水にも, 津軽十二瀬, 覆ヶ浦			Coscinodiscus lacustris			
<i>Thalassiosira nitzschoides</i>	1			1	1		海水								
合 計	26	30	15	117	23	106	27								
未特定	2	1	1	31	4	13	3								
破 片	14	25	29	39	94	60	14								
試料 1 cm ² 中の殻数密度	1.1	1.2	6.4	1.5	1.1	3.6	1.2								
	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁵	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴								
定形殻保存率 (%)	66.7	55.4	35.6	79.1	22.3	66.3	68.2								



挿図10 菅谷上寺地遺跡における主要珪藻ダイアグラム

第2節 青谷上寺地遺跡調査概報 —とくに遺貝群集について—

放送大学鳥取学習センター

赤木 三 郎

1. はじめに

青谷上寺地遺跡の分布範囲確認のためのボーリングが行われた。3本の調査孔のうち、No. 2地点とNo. 3地点では深度-6mまで掘削され、柱状図とサンプルが得られたが、いずれも-4mから最深部の6m付近の黒褐色～暗灰褐色粘質土及び砂混じり粘質土の中にカキや巻貝が混入しており、一部では大量にカキ殻がみられた。これらの貝類が自然状態で堆積したものであるか、人為的に食べた殻を投棄して堆積したいわゆる貝塚であるかの判断をこれらの資料から検討した。この深度は青谷上寺地遺跡とはほぼ同一水準に位置するので遺跡の範囲内か、遺跡の分布域をはずれるものであるか、もしははずれるにしてもどのような堆積環境であったかを明確にする必要がある。産出する貝殻の産状とその種構成を担当して調べた。

2. 試料

採取されたサンプルはNo. 2地点では2-1, 2-2, 2-3, 2-4の4カ所、No. 3地点では3-1, 3-2, 3-3の3カ所の合計7点である。

No. 2地点

- 2-1: 粘土混じり砂質土40cm。植物遺体を含み、地層に垂直な生痕が多数見られる。潮間帯か干潟を思わせる。
- 2-2: 褐灰色の砂質土で一部は川砂と考えられる。約40cm。下位はカキ殻を含む貝殻を含む砂である。風化が著しく単独では取り出せないが、自然堆積のもので、カキ殻は破片が多く、ほかの貝も混在する。
- 2-3: 粘質土38cm。粗粒の砂の固まりが混入する。カキを多量に含み、双殻が合わさって出るのが多い。食料にしたものではなく、生息地近くで死後、運ばれて自然堆積したものであると考えられる。
- 2-4: 粘質土。62cm。巻き貝を主に含み二枚貝も見られる。数カ所に1～3cm程度の砂混じり貝殻が見られる。団塊と考えられる。

No. 3地点

- 3-1: -4.2m付近の暗褐色砂混じり粘質土で、厚さは20cm以上。貝殻を多数含んでおり、ブロックで採取。貝の産状は点在型で、異地性の散在型である。
- 3-2: 黒褐色砂混じり粘質土。厚さ14cm。植物遺体を含み、全体が有機質に富んでいるが、貝は見られない。内湾で流水の影響下に堆積したものと考えられる。
- 3-3: -5.15m～-5.70m間での40cm黒褐色粘質土。団塊状に砂が混入している。巻き貝が含まれている。
- 3-6m付近: 砂混じり黒褐色粘質土。サルボウを含む。砂がちで生痕らしいものが見られる。

3. 貝の同定

産出した軟体動物の種類は以下のようであった。同定にあたっては大阪市立自然史博物館の石井久夫先生に指導して頂いた。

斧足類

Scapharca subcrenata (LISCHKE) サルボウガイ

Crassostrea gigas (THUNBERG) マガキ

Phillucina pisidium DUNKER ウメノハナガイ

腹足類

Cerithium coralium KIENER コゲツノブエ

Cerithidea djadjariensis (MARTIN) カワアイ

Batillaria zonalis (BRUGUIERE) イボウミニナ

Niotha fidus (Reeve) ? イボムシロ

これらの貝類は全体に内湾～干潟の貝であるが、暖海性のものであるといえる。特に注目されるのは *Cerithium coralium* KIENER コゲツノブエを産出することである。この種は紀伊半島以南、奄美以南の潮線下に生息し、本州では弥生期のやや温暖化した時期に生息した可能性があるといわれ、注目されている。

4. 考察

No. 2 及び No. 3 の貝を産出する層準は背谷上寺地遺跡と同一層準であるが、カキ殻を密集して産出する部位は貝塚でなく、以下のような理由から自然堆積のものと判断される。

- ① カキ殻は双殻が合体したものが多く、その産出状態は散在型である。
- ② カキ以外の微小巻き貝などを混在し、人為により共存しているとは考えられない。
- ③ 貝層に並行したラミナが発達しており、水中での堆積であることがいえる。
- ④ 貝殻の破片や、遊離した二枚貝の貝殻などを伴う。
- ⑤ カキが付着するような岩場は見られないが、近くには岩礁もあることから、ごく近くに生息していたものが死後、流水などによりわずかに移動したものと考えられる。

5. まとめ

青谷町の住宅建設予定地のボーリング試料は時代的には背谷上寺地遺跡と同一層準であるが、堆積環境は汽水ないし海水の環境下に堆積したものであり、自然貝層であると結論される。

参考文献

吉良哲明 (1959) 原色日本貝類図鑑 保育社

波部忠重 (1975) 学研中高生図鑑 貝Ⅰ・Ⅱ 学習研究社

磯貝文夫・柴田松太郎・真野勝友 (1993) 貝化石のしらべかた 地学団体研究会

森下晶・糸魚川淳二 (1986) 古生態学 朝倉書店

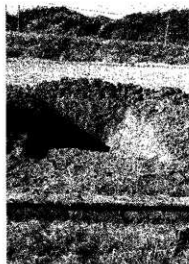
報告書抄録

ふりがな	あおやちょうないいせきはくつちようさほうこくしよ							
書名	青谷町内遺跡発掘調査報告書XI							
副書名	養郷村内出土地Ⅱ、養郷村内出土地Ⅲ、青谷上寺地遺跡							
巻次								
シリーズ名	青谷町埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第20集							
編集者名	森 佳樹 加川 崇							
編集機関	青谷町教育委員会							
所在地	〒689-0592 鳥取県気高郡青谷町青谷667番地 TEL 0857-85-2529							
発行年月日	2002年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
養郷村内出土地Ⅱ	青谷町大字養郷字村内	31343	1-377	35° 30' 10"	134° 00' 46"	2001. 4. 26~ 2001. 5. 10	24.5	宅地造成
養郷村内出土地Ⅲ	青谷町大字養郷字村内	31343	1-377	25° 29' 58"	134° 00' 50"	2001. 11. 19~ 2001. 11. 21	13.1	予防治山
青谷上寺地遺跡	青谷町大字青谷字中橋手	31343	1-82	35° 30' 56"	134° 00' 04"	2002. 2. 1~ 2002. 2. 20	5.6	若者向け住宅建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
養郷村内出土地Ⅱ	散布地	古墳					試掘調査として実施	
養郷村内出土地Ⅲ	散布地	古墳		ピット		土師器	試掘調査として実施	
青谷上寺地遺跡	散布地	弥生				土玉	試掘調査として実施	

圖 版



養郷村内出土地Ⅱ・Ⅲ遠景



養郷村内出土地Ⅱ第2トレンチ



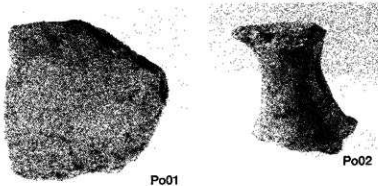
養郷村内出土地Ⅲ第1トレンチ



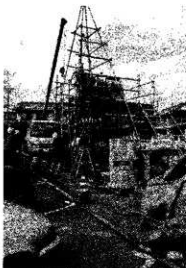
養郷1号墳現況



養郷村内Ⅲ第3トレンチ



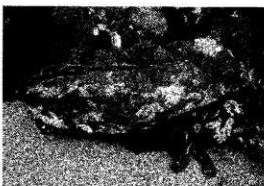
養郷村内出土地Ⅲ出土遺物



青谷上寺地遺跡ボーリング設置状況



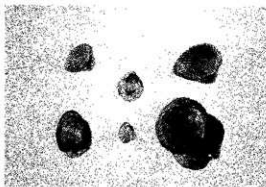
青谷上寺地遺跡第2トレンチ



青谷上寺地遺跡第2トレンチ牡蠣出土状況



青谷上寺地遺跡第2トレンチ出土牡蠣



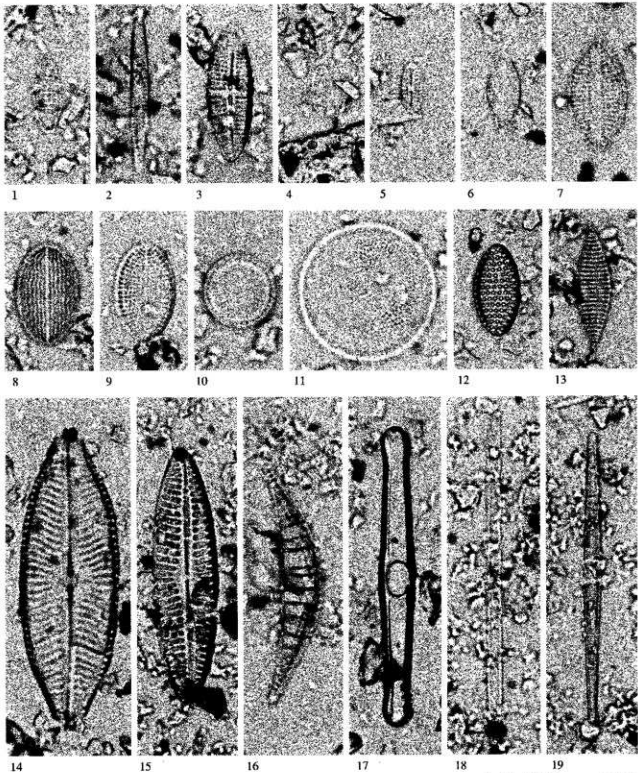
青谷上寺地遺跡第2トレンチ出土具



Po01

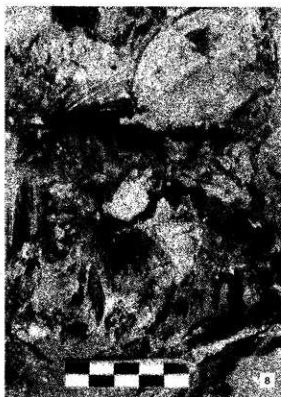
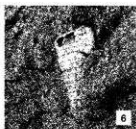
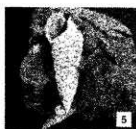
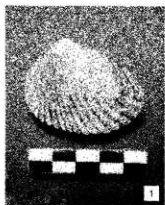
青谷上寺地遺跡出土遺物

青谷上寺地遺跡の硅藻



1-14, 16-17 ——— 10 μ m
 15, 18-19 ——— 10 μ m

1. *Diatoma* sp. 2. *Rhoicosphenia abbreviata* 3. *Achnanthes brevipes* 4. *Achnanthes lanceolata* 5. *Diploneis* sp.
 6. *Navicula platyventris* 7. *Rhaphoneis surirella* 8. *Cocconeis placentalis* 9. *Cocconeis scutellum* 10. *Palaria sulcata*
 11. *Thalassiosira bramaputrae* 12. *Nitzschia granulata* 13. *Nitzschia lanceolata* 14. *Navicula elegans*
 15. *Navicula yarrensis* 16. *Rhopalodia gibberula* 17. *Grammatophora macilenta* 18. *Thalassionema nitzschoides*
 19. *Synedra ulna*



1. *Scapharca subcrenata* (LISCHKE) サルボウガイ 両殻が合わさったままで露出しており現地牛のものである。
2. 巻貝の産出状態。イボウミニナ、キビムシロガイ、コンペイトウガイ (?), カニモリガイなどが殻を崩れて産出する状況から流水の影響下にあったと考えられる。
3. *Batillaria zozaris* (BRUGUIERE) イボウミニナ
4. 巻貝の産出状態 (2の反対側)。
5. *Clypeomorus coralium* (KIRENER) ? コゲツノブエガイ×1

6. *Ochetoclava kochi* (PHILIPP) カニモリガイ×1
7. *Clypeomorus trullii* ? チュウクワノミカニモリ×1
8. *Cusostrea gigas* (THUNBERG) マガキ
カキの殻片の密着したなかに巻き貝なども混入している。両殻が合体したままのカキ殻もみられるので自然堆積したものと判断できる。
9. 2-4の粘質上に発達した生痕。生管内はやや砂質の泥で充填されている。生痕の径は0-13mm。反さは不明。

青谷町埋蔵文化財調査報告書20

青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅻ

（養郷村内出土地Ⅱ）
（養郷村内出土地Ⅲ）
青谷上寺地遺跡

発 行 2002. 3

発行者 青谷町教育委員会

〒689-0501 鳥取県久美郡青谷町大字青谷667番地
TEL (0857) 85-2529

印 刷 勝美印刷株式会社

鳥取県東伯郡羽合町長瀬
TEL (0858) 35-4411

